

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ			重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づ く習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)				症状の悪化 につながるお それ		適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づ く習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)		症状の悪化 につながるお それ		適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
ビタミンB1 (塩酸チアミ ン) 成分	塩酸チアミ ン散0.1% 「ホエイ」/ 塩酸チアミ ン散1%「ホ エイ」	ビタミンB1は ATP存在下に thiamine diphosphate に変換し、生 理作用を現 す。ピルビン 酸の脱炭酸 反応やTCA サイクル内の αケトグルタ ル酸の脱炭 酸反応に関 与。トランスケ トラーゼの補 酵素として五 炭糖リン酸回 路での糖代 謝や核酸代 謝にも関与					頻度不明(過 敏症)									ビタミンB1の 欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される疾患 (神経痛、筋 肉痛、末梢神 経炎・末梢神 経麻痺、心筋 代謝障害)で は、効果がな いのに月余 にわたって遠 然と使用す べきでない。		通常、成人には塩酸チアミ ンとして、1回1～10mgを1 日1～3回経口投与する。 塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」: 1回1～10mg、1日1～3 回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエイ」: 1回0.1～1g、1日1～3 回経口投与 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンB1欠 乏症の予防及 び治療 2. ビタミンB1の 需要が増大し 、食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦、はげ しい肉体労働 時等) 3. ウェルニッケ 脳炎 4. 脚気衝心 5. 下配疾患の うち、ビタミン B1の欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される場合 神経痛、筋肉 痛、関節痛、末 梢神経炎・末 梢神経麻痺、 心筋代謝障害 [5. の適応に 対して、効果が ないのに月余 にわたって遠 然と使用すべ きでない。]	

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)重篤な副作用につながるおそれ		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 寮免に酪酸リポフラビンを投与すると、ラノリン-綿実油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。					0.1~5%未満(下痢、悪心・嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)						尿を黄変させる(臨床検査値に影響)			高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用しないこと。		酪酸リポフラビンとして、通常、成人1日5~20mgを2~3回に分経口投与する。 高コレステロール血症には、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	高コレステロール血症 ビタミンB2欠乏症の予防及び治療。 下痢疾患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎 ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等)。 高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用しないこと。

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 適量使用・誤使用 があるもの	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
ビタミンB6 (塩酸ピリドキシン)	アデロキシン錠	体内でリン酸ピリドキサルとなり、細胞・ミトコンドリア内におけるB6酵素群の補酵素として生体のたんぱく質・アミノ酸代謝の中心的役割を果たす。γ-アミノ酪酸の生成や各種のアミン類(アドレナリン、ノルアドレナリン、5-ヒドロキシトリプトミン等)の生成に不可欠である。脂質代謝との関係も認められている。	レボドパ(レボドパの作用を減弱)				頻度不明(長期・大量投与:手足のしびれ、知覚異常等)	頻度不明(光線過敏症)			高齢者、妊婦、産婦、授乳婦等、新生児、乳幼児、小児等			長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	ビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される疾患(口角炎、口瘡炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害)では、効果が無いのに月余にわたって濃然と使用すべきでない。	長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常	塩酸ピリドキシンとして、通常成人1日10~100mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。きわめてまれであるが、依存症の場合には、より大量を用いる必要がある場合もある。依存症に大量を用いる必要のある場合は観察を十分に行いながら投与すること。特に新生児、乳幼児への投与は少量から徐々に増量し、症状に適合した投与量に到達させること。高齢者では減量。		ビタミンB6欠乏症の予防及び治療(薬物投与によるものを含む。例えばイソニアジド、サイクロセリン、ペニシラミン)	ビタミンB6の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦など) ビタミンB6依存症(ビタミンB6反応性貧血、ビタミンB6依存性痲痺、アミノ酸代謝異常など) 下記疾患のうちビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合 口角炎、口瘡炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害(痲痺)

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるも の	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康損 害のおそれ			
ビタミンB12 (メコバラミン)	メテコパ ール錠250 μ g /メテコ パール錠 500 μ g	メコバラミン は、生体内補 酵素型ビタミン B12の1種 であり、ホモ システインから メチオニン を合成するメ チオニン合成 酵素の補酵素 として働き、メ チル基 転位反応に 重要な役割を 果たす。 神経細胞内 小器官へよく 移行し、核 酸・蛋白質合 成を促進する作 用、 軸索内輸送、 軸索再生の 促進する作用 、 髓鞘形成(リ ン脂質合成) の促進する作 用、 シナプス伝達 の遅延、神経 伝達物質の 減少を回復す る作用 を有する。					0.1~5%未 満(食欲不振、 悪心・嘔 吐、下痢)	0.1%未満 (過敏症)			水銀及びその化 合物を取り扱う 職業従事者(長期大 量)				水銀及びその 化合物を 取り扱う職業 従事者に長 期にわたる 大量投与は 避けること が望ましい。本 剤投与で効 果が認めら れない場合、 月余にわた って漫然と使 用すべきでは ない。	錠250 μ g 錠500 μ g	通常、成人は1日6錠(メ コバラミンとして1日1,500 μ g)を3回に分けて経口投 与する。 ただし、年齢及び症状によ り適宜増減する。	末梢性神経障 害
															通常、成人は1日3錠(メ コバラミンとして1日1,500 μ g)を3回に分けて経口投 与する。 ただし、年齢及び症状によ り適宜増減する。 本剤投与で効果認めら れない場合、月余にわた って漫然と使用すべきで はない。水銀及びその化 合物を取り扱う職業従事 者に長期にわたって大 量に投与することは避 けることが望ましい。			

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用の おそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量(正) 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
ビタミンC	アスコルビン酸「ヨシダ」 アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。					頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等)			高齢者		下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血、鼻出血、肉内出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1. ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など)。 2. 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。 毛細管出血(鼻出血、肉内出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。 なお、2.の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。
ビタミンE	ユベラ錠 微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。 臓安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。 抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。 内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)				末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンC欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止

婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
その他	アミノエチルスルホン酸	タウリン散「大正」	・胆汁酸排泄促進作用を有する。 ・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、AI-P、γ-グロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロール比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合組織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。 ・心筋代謝改善作用、心筋保護作用 ・実験的慢性心不全による死亡率低下					0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振)	0.5%未満(過敏症)				高齢者						アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うっ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うっ血性心不全
	グルクロノラクトン	グロンサン散	循環血流量増加										高齢者					1回0.3~1g、1日3回、適宜増減。高齢者では用量に注意	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善、尋麻疹、湿疹、中毒疹、妊娠悪阻、妊娠中毒	

避妊薬

製品群No. 50

ワークシートNo.30

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ				薬理に基づき	適応禁忌	慎重投与	症状の悪化 につながるお それ				適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づき 習慣性		慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使用のおそ れ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
メンフェゴ ール	腔内で溶け て、陰壁や子 宮頸部に 密着して殺精 子作用を発 揮する						発疹、発赤、 かゆみ			医学上の理由(病 気等)で絶対に妊 娠を避けなければ ならない人 男性か女性(ある いは両方)が薬や 洗剤などにより、ア レルギー症状(発 疹、かゆみ等)を起 こしたことがある人 性器にびらん、炎 症等を起こしている 人			腫用(のみ)使用し、内服 しないこと			必要時に1回1錠を腔内深 く挿入すること	殺精子作用に よる避妊

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
トリコマイシン	なし																		
クロラムフェ ニコール	クロマイ醃 錠	グラム陽性、 陰性菌に抗 菌作用					頻度不明(長 期連用・内 服・注射等全 身投与と同 様な症状)	頻度不明(過 敏症)		本剤成分過敏症 既往歴	高齢者				必要最小限の使 用。内服させない。	長期連用しないこと。		1日1回1錠、局所に挿入	クロラムフェニ コール感性菌 による細菌性 膣炎
エチニルエス トラジオール	外用なし、プ ロセキソール 錠	前立腺、精の う重量を減少 させ血中テスト ステロン値 を低下させる			血糖降下薬(血糖降下作用 の減少)、リトナビル(本剤の 作用減少)	頻度不明(心 不全、狭心 症、長期連 用：血栓症)	頻度不明(貧 血、肝機能異 常、血圧上 昇、精神障害 の再発、大量 継続投与に より高カルシ ウム血症・ナ トリウムや体 液貯留、不正 出血、経血量 変化、下腹部 痛、乳房緊 張感、乳房痛、 悪心、おう 吐、食欲不 振、下痢、頭 痛、めまい、 倦怠感、陰萎	頻度不明(過 敏症)		エストロゲン依存 性腫瘍およびその 疑い(腫瘍の悪化 あるいは顕性化)、 血栓性静脈炎・肺 塞栓症または既往 歴(血液凝固能の 亢進によりこれら の増悪)	肝障害、子宮筋 腫、子宮内規症ま たは既往歴、心疾 患・腎疾患または 既往歴、てんかん、 糖尿病、高齢者、				長期連用：血 栓症、卵巣ホル モン剤を長 期間(1年以上) 使用した 閉経期以降 の婦人では 子宮内腺癌 を発生する危 険度が対照 群に比べ高 く、使用期 間、使用量と 危険度の上 昇に相関性 があることを 示唆する疫 学調査あり		1回0.5〜1mg、1日3回。適 宜増減。高齢者減量	前立腺癌、閉 経後の末期乳 癌(男性ホルモ ン療法に抵抗 を示す場合)	

その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	J 用法用量	K 効能効果
		相相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ					重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌				
エストラジオール	貼付剤あり、エストラダムM	卵巣機能低下または消失によるエストロゲン欠乏症による閉経症状の改善。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	頻度不明(静脈血栓塞栓症、血栓性静脈炎)、乳癌・脳動脈性心疾患・脳卒中・痙攣などの発生との関連性を示唆する報告あり。	頻度不明(アナフィラキシー様症状)	頻度不明(片頭痛、静脈瘤の悪化、胆石症、胆のう疾患、胆汁うっ滞、痔瘻、下肢痛、ポルフィリン症の悪化、喘息の悪化、耳硬化症)、5%以上(一次刺激性の接触性皮膚炎、不正出血、消退出血、帯下、乳房緊満感)、0.1~5%未満(かぶれ、水疱、色素沈着、外陰部腫脹感、外陰部掻痒感、子宮内腺増殖、乳房痛、乳頭痛、乳腺症、頭痛、眼気、めまい、動悸、おう吐、吐気、下痢、腹部膨満感、便秘、心窩部痛、浮腫、肝機能障害、腹痛、下腹部痛、関節痛、腰痛、耳鳴、体重増加・減少、倦怠感、トリグリセリド上昇、フィブリンノーゲン増加)、0.1%未満(不眠、胸部不快感、血圧上昇、発熱)		エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い(腫瘍の悪化あるいは顕性化)、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴(血液凝固能の亢進によりこれらの増悪)、本剤成分過敏症既往歴、妊婦または妊娠の可能性および授乳婦、動脈性の血栓塞栓症			大量投与 ナトリウムや体液の貯留	長期連用、ホルモン剤と黄体ホルモンを長期間使用した女性では乳癌、肝動脈性疾患、脳卒中、痙攣を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間と危険度の上昇に相関性があるとの報告あり	1回1枚(0.72mg)貼付。2日ごとはりかえ	更年期障害および卵巣欠落症状に伴う、血管運動神経症状、泌尿生殖器の萎縮症状、閉経後骨粗鬆症	

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	機能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用・誤使 用のおそれ
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドรามミン	ベナ錠	抗ヒスタミン作用: H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。 ヒスタミン遊離抑制作用。		アルコール・中枢神経抑制剤・MAO阻害剤(中枢神経抑制作用が増強)、抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用が増強)		薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの		頻度不明(過 敏症)	緑内障(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化)					塩酸ジフェンヒドรามミンとして、通常成人1回30～50mg(3～5錠)を1日2～3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	尋麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、結核熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒
	d-マレイン酸クロルフェニラミン	ポララミン錠 2mg	抗ヒスタミン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)		5%以上又は頻度不明(過敏症)	5%以上又は頻度不明(過敏症)					d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1～4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、狭窄性消化性潰瘍、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。

抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
		相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌		慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		適量使用、誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	適量使用、誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
抗ヒスタミン成分	メキタジン	ゼスラン錠	ケミカルメディアーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用	中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メキシサレン(光線過敏症)	肝機能障害・貧血・血小板減少(頻度不明)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST、GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視調節障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感、頻度不明(黄痘)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作。			本剤の成分、フェノチアジン系化合物及びその類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(瞳孔を弛緩)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児			過量投与で眠気、悪心、嘔吐、経度の抗コリン作用性障害	他のフェノチアジン系化合物・長期投与又は大量投与により角膜・水晶体の混濁、網膜・角膜の色素沈着		1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌・他剤との併用に より重大な問題 が発生する おそれ	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき 副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量(誤使用のおそれ)	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
抗炎症成分	グリチルリチン酸モノアンモニウム	グリチロン注一号	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)				偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等					長期適用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
ビタミン成分	ビタミンB1(塩酸チアミン)	塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」 塩酸チアミン散1%「ホエイ」	ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトラゼの補酵素として五炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与					頻度不明(過敏症)								ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎、末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1~10mgを1日1~3回経口投与する。塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1~10g、1日1~3回経口投与 塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1~1g、1日1~3回経口投与 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療 2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等) 3. ウエルニツケ脳炎 4. 脚気衝心 5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合 神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎、末梢神経麻痺、心筋代謝障害 [5. の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。]

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ビタミンB2	ハイボン錠 20mg	コレステロール上昇抑制作用 家兎に酪酸リポフラビンを投与すると、ラノリン-綿実油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した。				0.1~5%未満(下痢、悪心・嘔吐、胃膨満、腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感、食欲不振)						尿を黄変させる(臨床検査値に影響)		高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。		酪酸リポフラビンとして、通常、成人1日5~20mgを2~3回に分けて経口投与する。 高コレステロール血症には、通常、成人1日60~120mgを2~3回に分けて経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	高コレステロール血症 ・ビタミンB2欠乏の予防及び治療 ・下痢疾患のうち、ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与する場合、口角炎、口唇炎、舌炎、脂漏性湿疹、結膜炎、びまん性表層角膜炎 ・ビタミンB2の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体的労働時等) ・高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用しないこと。

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	ワークシートNo.33				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ		
ビタミンB6 (塩酸ピリド キシン)	アデロキシ ン錠	体内でリン酸 ピリドキサー ルとなり、細 胞・ミトコン ドリア内にお けるB6酵素群 の補酵素とし て生体のたん 白質・アミノ 酸代謝の中心 的役割を果た す。γ-アミ ノ酪酸の生成 や各種のアミ ン類(アドレナ リン、ノルアド レナリン、5- ヒドロキシトリ プタミン等)の 生成に不可 欠である。脂 質代謝との関 係も認められ ている。	レボドパ(レボドパの作用を 減弱)			頻度不明(長 期・大量投 与・手足のし びれ、知覚異 常等)	頻度不明(光 線過敏症)			長期・大量投与 で手足のしび れ、知覚異常		ビタミンB6の 欠乏又は代謝 障害が関与 すると推定 される疾患 (口角炎、口 唇炎、舌炎、 急・慢性濕 疹、脂漏性濕 疹、接触皮膚 炎、末梢神経 炎、放射線障 害)では、効 果がないの に月余にわ たって激然と 使用すべき でない。 長期・大量投 与で手足のし びれ、知覚異 常	塩酸ピリドキシンとして、通 常成人1日10~100mgを経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。 きわめてまれであるが、依 存症の場合には、より大 量を用いる必要がある場 合もある。依存症に大量を 用いる必要がある場合は 観察を十分に行いながら 投与すること。特に新生 児、乳幼児への投与は少 量から徐々に増量し、症 状に適合した投与量に到 達させること。高齢者では 減量。	ビタミンB6欠 乏症の予防及び 治療(薬物投 与によるものを 含む。例えば イソニアジド、 サイクロシリ ン、ペニシラ ミン) ビタミンB6の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際、消耗性疾 患、妊産婦、 授乳婦など) ビタミンB6依存 症(ビタミンB6 反応性貧血、 ビタミンB6依 存性痲痺、ア ミノ酸代謝異常 など) 下記疾患の うちビタミンB6 の欠乏又は代 謝障害が関与 する場合 口角炎、口唇 炎、舌炎、急 ・慢性濕疹、 脂漏性濕疹、 接触皮膚炎、 末梢神経炎、 放射線障害(宿 酔)
ニコチン酸ア ミド	ニコチン酸 アミド散ソ ン	ニコチン酸ア ミドはニコチ ン酸とともに NAD、NADP に組み込ま れ、脱水素酵 素の補酵素と して広く生体 内の酸化還元 反応にあ ずかる。										2の適応(効 能又は効果) に対して、効 果がないの に月余にわ たって激然と 使用すべき でない。	1・2ニコチン酸アミドとして 通常成人1日25~200mgを 経口投与する。なお、年 齢、症状により適宜増減す る。	口角炎、口内 炎、舌炎、接触 皮膚炎、急・慢 性濕疹、光線 過敏性皮膚 炎、メニエル症 候群(レイ ノー病)、四肢冷 感、凍瘡、凍 傷)、耳鳴、難 聴

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化								
評価の視点		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果				
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
	パントテン酸 カルシウム	パシカル散	パントテン酸 はCoAの構成 成分であり、 CoAは生体内 でアセチル化 をはじめ、ス テロイド、脂 肪酸、ポル フィリン等 種々の生体 必須物質の 合成に関与 するとともに、 脂肪、蛋白 質、炭水化物 の代謝にも関 与している。									大量投与により 腹痛、下痢	2の適応(効 能又は効果) に対して、効 果がないの に月余にわた って濺然と 使用すべき でない。		パントテン酸カルシウムと して1日10~200mg(0.1~ 2.0g)を1~3回に分けて経口 投与する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	1.パントテン酸 欠乏症の予防 および治療、 パントテン酸の 需要が増大し、 食事からの 摂取が不十分 な際の補給 (消耗性疾患、 甲状腺機能亢 進症、妊産婦、 授乳婦など)2. 下記疾患のうち、 パントテン酸の 欠乏または 代謝障害が 関与すると推 定される場合。 ストレプトマイ シンおよびカナ マイシンによる 副作用の予防 および治療、 接触皮膚炎、 急・慢性湿疹、 弛緩性便秘、 なお、効果 がないのに月 余にわたって 濺然と使用す べきでない。		
気 管 支 拡張 成分	d1-塩酸メ チルエフェ ドリン	d1-塩酸メ チルエフェ ドリン散	アドレナリン 作動性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	カテコールア ミン製剤(不 整脈、場合 によっては 心停止を起 こす)	MAO阻害剤・甲 状腺製剤(作 用が増強)、 キサンテン誘 導体・ステロ イド剤・利尿 剤(血清カリ ウム値が低 下)	β2刺激剤に より重篤な血 清カリウム値 の低下		頻度不明(熱 感)、0.1~ 5%未満(心 悸亢進、顔 面蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眠気、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇)	頻度不明(過 敏症)、		カテコールア ミン製剤を 投与中(不 整脈、場合 によっては 心停止を起 こすおそれ)	甲状腺機能亢 進症、高血 圧症、心 疾患、難 尿症、高 齢者、妊 婦又は妊 娠している 可能性 のある婦 人、授乳 中の婦人 、小児 等、重症 喘息(血 清カリウ ム低下)			過度に使用を 続けた場合、 不整脈、場合 によっては 心停止を起 こすおそれ がある		d1-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25~ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性 気管支炎、 慢性気管支 炎、肺結核、 上気道炎 (咽喉頭炎、 鼻カタル) 荨麻疹、湿 疹

その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 警戒性		症状の悪化 につながるお それ		使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康損 害のおそれ	用法用量	効能効果	
アミ ノ酸 類 成 分	アミノ酸エチル スルホン酸 (タウリン)	タウリン散 「大正」	・胆汁酸排泄 促進作用を 有する。 ・実験的肝障 害に及ぼす 影響を有し、 AI-P、γ-グ ロブリン、 BSP、血清コ レステロール /血清コレス テロールエス テル比を改善 させた。また、 肝細胞の再 生を促進して 組織像を改善 させた。さら に慢性障害 群においては 間質の結合 織増殖を抑制 した。胆汁 分泌などの肝 細胞機能維持 に働いた。 ・心筋代謝改善 作用、心筋 保護作用 ・実験的慢性 心不全による 死亡率低下				0.5%未満 (嘔気、下 痢、腹部不快 感、便秘、食 欲不盛)	0.5%未満 (過敏症)			高齢者							アミノエチルスルホン酸と して、成人1回1gを1日3 回食後に経口投与する。 なお、うつ血性心不全に用 いる場合、本剤は強心利尿 剤で十分な効果が認め られないときに、それと併 用すること。高齢者で減 量。	高ビリルビン血 症(閉塞性黄 疸を除く)にお ける肝機能の 改善 うつ血性心不 全
整 腸 成 分	乾燥酵母	乾燥酵母 「ホエイ」	乾燥酵母は 含有する諸成 分が総合して 栄養補給、代 謝機能促進、 食欲増進、整 腸などの薬効 を現す。				頻度不明(大 量投与による 下痢)							大量で下痢			乾燥酵母として、通常成人 1日5～10gを3回に分けて経 口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	ビタミンB群、 たん白質の需 要が増大し、 食事からの摂 取が不十分な 際の補給	